

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 30 日現在

機関番号：26301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12131

研究課題名(和文) 学生ボランティア活動の継続性を促進するソーシャルサポート・システムの構築

研究課題名(英文) The Establishment of a Social Support System to Promote the Continuity of Student Volunteer Activities

研究代表者

松井 美由紀 (Matsui, Miyuki)

愛媛県立医療技術大学・保健科学部・准教授

研究者番号：30511191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、医療系学生の継続的なボランティア活動過程を明らかにし、継続性のあるボランティア活動を促進するソーシャル・サポートへの示唆を得ることである。ボランティアを2年以上継続している医療系学生8名を対象に半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッドセオリー・アプローチにて分析した。その結果、学生がボランティア活動を継続することに至った過程とは『使命感が充たされる』過程であった。継続的なボランティア活動には、学生自身がやるべき役割を果たせ、成果を実感しやりがい感につながるような支援や活動に共感し活動の「活力」を感じることができ環境づくりへのサポートの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ボランティア活動は自己成長や社会とのつながりの認識が広がるという観点から学生の発達過程において教育的価値が大きいと言われている。学生の教育支援を職責とする教員には、社会・地域貢献および学生の教育的価値を高めていく責務がある。

本研究では、医療系学生の主体的かつ継続的なボランティア活動過程を明らかにし、ボランティア活動を促進するソーシャルサポートシステムの構築を目指した。この結果は、学生が継続的かつ主体的にボランティア活動し、学生の将来に有益な経験となり仕事力や生活力につながり、社会や地域貢献を含めた学生への教育に貢献できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to evince the processes of continuous volunteer activities of medical/nursing students and thereby gain insights regarding social support to promote continuous volunteer activities. Semi-structured interviews were conducted with eight medical/nursing students who had engaged in volunteer activities for over two years and the results were analyzed using the modified-grounded theory approach (M-GTA). As a result, it was found that the processes that made the students continue their volunteer activities were ones that "fulfill their sense of mission." This finding suggests the necessity of support for students to fulfill their essential roles and gain a sense of achievement and fulfillment, in addition to establishing an environment where they can feel empathy toward and the "momentum" of their volunteer activities,

研究分野：看護学

キーワード：学生ボランティア 活動継続過程 サポート

## 1. 研究開始当初の背景

ボランティア活動とは、一般的に「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」<sup>1)</sup>を指している。これらボランティア活動は、自己成長や社会とのつながりの認識が広がるということから学生の発達過程において教育的価値が大きい<sup>2)</sup>とされている。また、医療系をはじめとする大学や専門学校でも、災害ボランティアや育児ボランティアなど教育的価値だけでなく、社会・地域貢献を目的とした活動として、学生のボランティア活動を積極的に取り入れていること<sup>3)</sup>が報告されている。

学生のボランティア活動は、地域からの要請等もあり、主体的かつ継続的に参加することを求められる。特に医療系の学生は、災害ボランティアなどを含めた医療や福祉等にかかわるボランティア活動の要請が多い。医療系学生の場合、ボランティア活動が将来につながるという意味でも活動の意義は理解したうえで、参加するものの、主体的かつ継続的に活動する学生もいれば、そうではない学生もいる。ボランティア活動を継続する動機づけとして、谷田<sup>4)</sup>はボランティア活動が学びの視野を拡げ、人間関係を広めるといえることが影響しているとしている。さらに妹尾<sup>5)</sup>は、ボランティアの活動の援助効果や社会効果が援助効果を規定し、その援助成果がボランティア活動継続を動機づけることを報告している一方で、活動継続の動機づけに関する検討は、不十分であることを示唆している。これらから、主体的に活動を継続する動機づけを明らかにすることは喫緊の課題である。

さらに、ボランティア活動を継続するためには、活動を支援する環境づくりも欠かせない。香春ら<sup>6)</sup>は、ボランティア活動を看護教育の場として意義あるものにしていくためには、ヘルス・ボランティア活動をしている学生の学習ニーズにそった学習支援のあり方を明らかにしている。しかし、学生ボランティアを継続していくためには、学習支援のみではなく、ソーシャルサポートを考えた体制づくりは不可欠であり、教員の果たす役割も重大である。

これまでの医療系の学生ボランティア活動に関連した先行研究は、ボランティア体験の教育効果<sup>7)</sup>、体験レポートや調査によるボランティア活動の学び<sup>9,10)</sup>、ボランティア体験に対する学生の意識や動機<sup>11)</sup>が報告され、これらボランティア活動の内容の多くは、災害や施設訪問で単発的な活動であった。また、ほとんどが学びや意識などに特化しており、現象をプロセス的に捉えた研究ではなかった。これらから、どのように自主的にボランティア活動を継続しているのか、その過程は未だに明らかにされていない。したがって、医療系学生の自主的かつ継続的な視点に着目したボランティア活動過程は未確立な状態であるといえる。学生の教育支援を職責とする教員には、社会・地域貢献および学生の教育的価値を高めていく責務があることから、学生ボランティア活動の継続性を促進し支援していくことは重要であり、かつ急務な課題である。

そこで、医療系学生が継続性のあるボランティア活動のできるサポート体制構築の一助となるよう、本研究では、文献と主体的かつ継続的にボランティア活動をした学生からのインタビューによって、医療系学生が継続的なボランティア活動に至る過程を明らかにし、継続的なボランティア活動への支援に対する示唆を得る。

## 2. 研究の目的

医療系学生が継続的なボランティア活動に至る過程を明らかにし、継続的なボランティア活動への支援に対する示唆を得る。

- 1) 医療系学生が継続的なボランティア活動につながるための体験構造を、国内文献の知見を統合して明らかにする。
- 2) 主体的かつ継続的にボランティア活動をした学生からのインタビューによって、医療系学生が継続的なボランティア活動に至る過程を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 1) 国内文献によるボランティア活動につながる体験構造に関する研究

医学中央雑誌(Web)にて“ボランティア and 看護学生”、“ボランティア and 大学生”をキーワードとし、“原著論文”“会議録除く”に限定し検索した。さらに、医療系学生以外、授業活動のボランティア研究を除外した文献20件を分析対象とした。分析対象文献の結果の記述からボランティアに関する体験を抽出してコード化し、質的帰納的な方法により分析した。また、それぞれの関係性を検討し継続的なボランティア活動に繋がる体験の構造図を示した。

### 2) 医療系学生が継続的なボランティア活動に至る過程の研究

本研究の対象者は、がんサバイバーを支える社会活動にボランティアとして2年以上継続参加した20歳以上の医療系学生、かつ研究参加の同意が得られた者とする。今回、自主的に継続してボランティア活動をしていたのが、がんサバイバーを支える社会活動だったため、その活動に限定した。データ収集は、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行い、対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成した。面接内容は、属性、ボランティア活動参加動機やボランティアに参加するまでの体験と思い、参加してからの体験と思い、ボランティア活動を続ける理由などで構成した。データ分析は、面接内容の逐語録をデータとし、Modified Grounded Theory Approach(以下、M-GTA)を用いた。分析焦点者を「2年以上ボランティア活動を継続している医療系学生」、分析テーマを「分析焦点者は、どのような思いでボランティア活動をしようと考え活動し、その活動を通して何を考え、ボランティア活動を継続することに至ったのか、その一連

の過程」とした。

#### 4. 研究成果

##### 1) 国内文献によるボランティア活動につながる体験構造に関する研究

継続的なボランティア活動に繋がる体験は、活動に向けての動機づけ 自己省察 活動に伴う思いと行動 自己成長への促進 将来を担う医療者としての備えの習得 ボランティア活動に対する継続への欲求 の6カテゴリであった。活動に向けての動機づけは、<他者からの誘い> <興味関心> <利他的な動機> <利己的な動機> <ボランティア活動の必要性> の5サブカテゴリで構成された。自己省察は、<ボランティア活動に対する葛藤> <ボランティア活動の意味付け> の2サブカテゴリで構成された。活動に伴う思いと行動は、<活動する自信> <活動の場での挫折や失敗> <活動の場における課題への対処> の3サブカテゴリで構成された。自己成長への促進は、<社会性の獲得> <自己変容> <ボランティアに対するポジティブイメージへの変化> <視野の拡がり> の4サブカテゴリで構成された。将来を担う医療者としての備えの習得は、サブカテゴリもカテゴリも同じであった。ボランティア活動に対する継続への欲求は、<継続したボランティア活動の必要性> <活動することへの自信> <興味や関心の更なる高まり> の3サブカテゴリで構成された。

また、影響する要因は、直接的な関わり合い 活動の充実感 自己効力感の高まり ボランティア活動に対する環境面の整備 活動に関する知識や技術 の5カテゴリであった。直接的な関わり合いは、<直接的に触れ合う> <お互いのつながり> の2サブカテゴリで構成された。活動の充実感 は、<活動への満足感> <活動への達成感> の2サブカテゴリで構成された。自己効力感の高まり は、<参加して得られた自己肯定感> <自己効力感の向上> の2サブカテゴリで構成された。ボランティア活動に対する環境面の整備 は、<ボランティア活動時間> <活動に必要な情報の提供> <経済面> <安全面> <理解者の存在> の5サブカテゴリで構成された。活動に関する知識や技術 は、<活動に要する知識不足> <活動に要する技術不足> の2サブカテゴリで構成された。

さらに、それらの関係性を示した結果、図1で示すような構造が明らかになった。活動に伴う思いと行動は、直接的な関わり合い 活動に関する知識と技術 が影響していた。加えて、自己省察 将来を担う医療者としての備えの習得 は、活動の充実感 自己効力感の高まり が影響し、ボランティア活動に対する継続への欲求 は、ボランティア活動に対する環境面の整備 が影響していた。

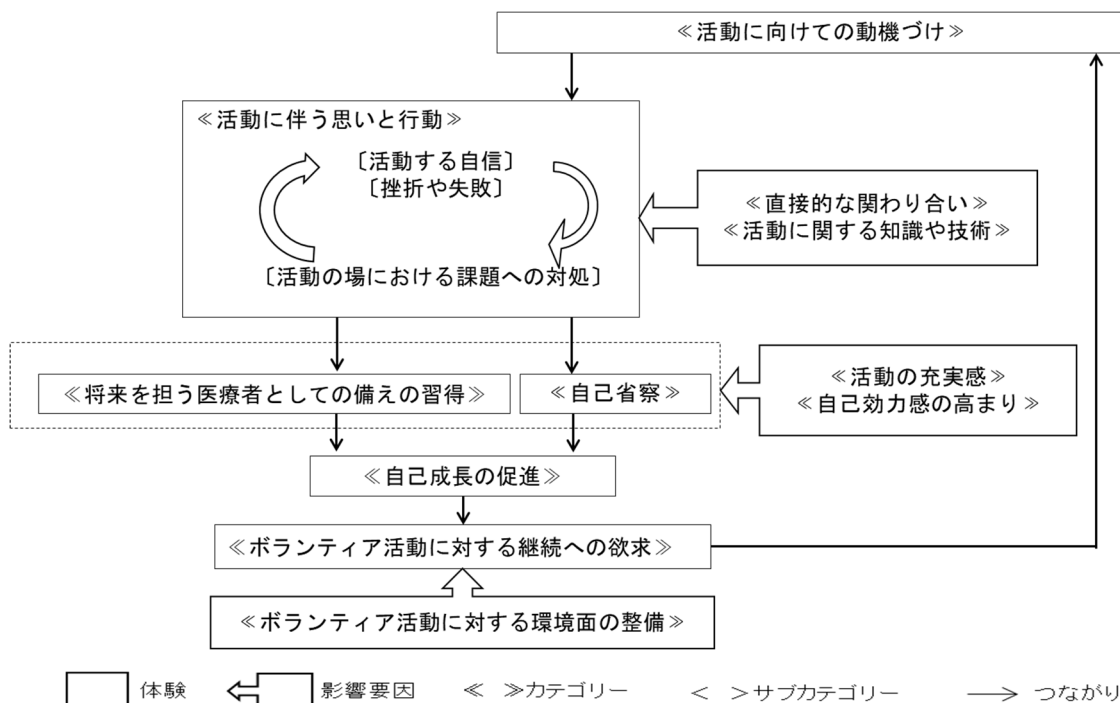


図1 ボランティア活動体験の構造図

継続的なボランティア活動に繋がるには、動機が利己的や利他的な動機など、どのような動機であろうとも、ボランティアとして直接的に関わり合うことが欠かせない体験であった。直接的に関わり合うことで、挫折や失敗はするものの、その場で臨機応変に対処し、対処できることで自信になっていたと言える。また、臨機応変に対応するためには、活動に関する知識や技術が

必要であった。特に医療系学生は、学習した経験が強みとなったのではないかと考える。直接的に関わった活動が、充実感や自己効力感の向上につながり、更なる動機づけになっていた。加えて将来に役立つことや自己成長を認識できること、環境面もボランティアの更なる動機づけになっていることが示された。

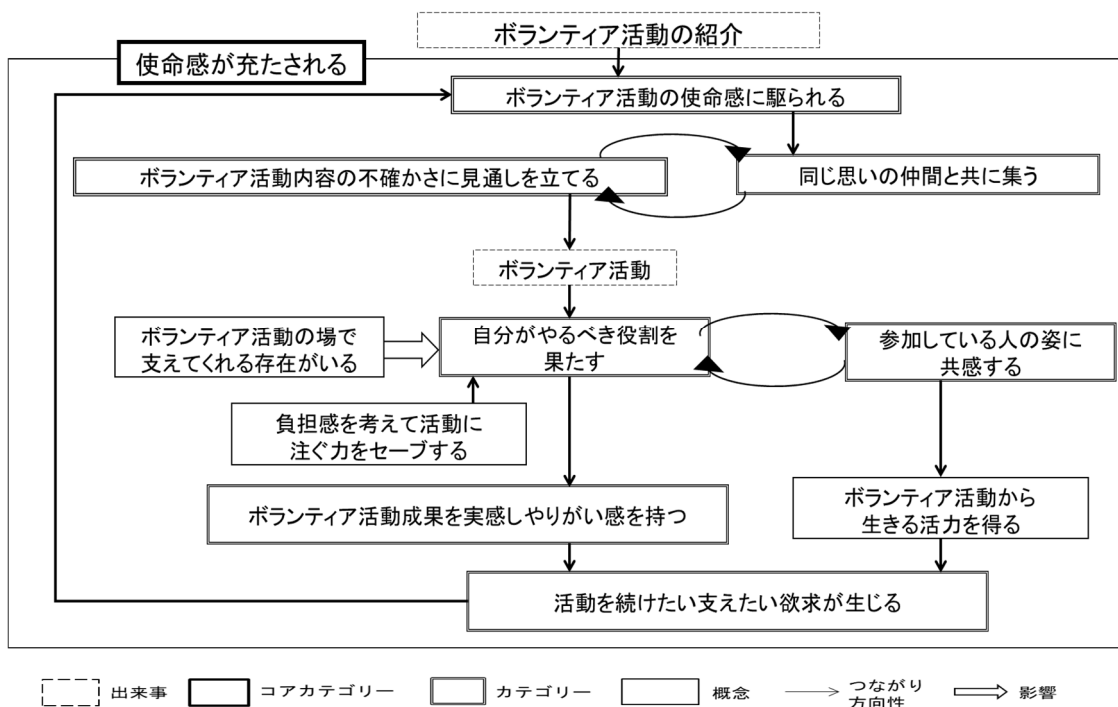
これらのことから、継続的なボランティア活動に繋がるためには、直接的に関わる機会を提供し、その活動のための準備をした上で、体験していくことが必要である。さらに体験した活動を意味づけ、自己成長を体験できるよう働きかけることや経済面、安全面、サポート体制を整える必要性が示唆された。

## 2) 医療系学生が継続的なボランティア活動に至る過程の研究

対象候補者10名中、8名から研究参加の同意が得られた。対象者の概要は、男性3名、女性5名で、ボランティア継続年数は、2～4年であった。全対象者から面接内容録音に同意が得られ、面接時間は平均37.8分であった。

生成された概念は、26概念で、うち23概念から7カテゴリーが生成され、残り3概念はカテゴリーと同等の説明力をもつ概念であった。これら7カテゴリーと3概念を包括するコアカテゴリーを1つ生成した。1コアカテゴリー、7カテゴリーおよび3概念相互の関係性を包括的に表す結果図(図2)を作成し、医療系学生がボランティア活動を継続することに至った過程として示した。さらに、結果図の概要を簡潔に文章化したストーリーラインを以下の通り作成した。なお、『 』はコアカテゴリー、【 】はカテゴリー、< >はカテゴリーと同等の説明力をもつ概念である。

医療系学生がボランティア活動を継続することに至る過程とは、『使命感が充たされる』ことが循環する過程である。この過程は、【ボランティア活動の使命感に駆られる】活動の決意から始まる。学生は、ボランティア活動を決意後、【同じ思いの仲間と共に集う】ことをしつつ、ボランティアに対する不安と期待が交錯した中で、自ら【ボランティア活動内容の不確かさに見通しを立てる】ことで不安を軽減する。参加後は、自ら 負担感を考えて活動に注ぐ力をセーブする 対処をしながら【自分がやるべき役割を果たす】ことに専念する。また、【参加している人の姿に共感する】ことで参加することの意義を感じ、<ボランティア活動の場で支えてくれる存在がいる>ことが学生の後押しとなる。これらのことが【ボランティア活動成果を実感しやりがい感を持つ】や<ボランティア活動から生きる活力を得る>ことにつながり、【活動を続けたい支えたい欲求が生じる】。この【活動を続けたい支えたい欲求が生じる】ことが、再び【ボランティア活動の使命感に駆られる】気持ちを生み出し、ボランティア活動継続へとつながる。



結果図：医療系学生がボランティア活動を継続することに至った過程

学生の継続的なボランティア活動に至る過程は、使命感をもってボランティア活動に向き合い、使命感が充たされる過程であった。

そのための支援として、活動前には、ボランティア活動の見通しが立てられるように具体的な活動内容の紹介や仲間づくりへの支援が必要である。さらに、活動を通して学生自身がやるべき役割を果たせるようなサポートや学生が成果を実感し、やりがい感につなげられるように、学生

の活動をフィードバックする働きかけも求められている。また、学生が活動に共感し、活動の「活力」を感じることができるよう周囲との調整や人とのネットワークづくりなど環境づくりの必要性が示唆された。

なお、今後、この結果をもとに現実に適応できるような具体的な支援のあり方について検討する予定である。

(引用文献)

1) 厚生労働省(2007): ボランティアについて, [www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e\\_0001.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf) (閲覧日 2016. 10. 5)

2) 齊藤ゆか(2010): 特集・ボランティア 大学でボランティア活動を促進する教育的意義と展望～見えない力をどう育むか～, 大学と学生/日本学生支援機構編, 第78号, 7-13.

3) 水上徹男(2003): 地域社会とボランティア活動-社会財の活用と互惠性の展開-, 佐々木正道(編) 大学生とボランティアに関する実証的研究, 3-21.

4) 谷田勇人(2001): 福祉ボランティア活動をする大学生の同期の分析, 社会福祉学, 41, 83-94.

5) 妹尾香織(2008): 若者におけるボランティア活動とその経験効果, 花園大学社会福祉学部研究 紀要, 16, 35-42.

6) 香春知永, 田代順子, 及川郁子, 小澤道子, 平林優子, 菱沼典子, 酒井昌子, 宮崎紀枝, 三橋恭子, 森明子(2005): ヘルス・ボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方 聖路加看護学会誌, 9, 11-18.

7) 小林洋子, 赤石三佐代, 松本明美, 福山なおみ(2013): 「ボランティア活動と自己省察」の学習効果 自己教育力の発見, ヘルスサイエンス研究, 17(1), 41-46.

8) 宮城眞理, 佐藤聡子, 永田英子(2015): 緩和ケア病棟実習中のボランティア体験から看護学生が学んだこと, 日本看護学教育学会誌, 24(3), 101-110.

9) 寺澤香純, 遠藤芳子(2012): 難病のこどもと家族支援のボランティア活動に参加した看護学生の体験とその意味, 北日本看護学会誌, 14(2), 21-28.

10) 松下由美子, 中川泉(2007): 看護学生の災害支援ボランティア活動に至る情緒的プロセスと動機づけ, 日本看護学教育学会誌, 16(3), 57-68.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮宇地秀代
2. 発表標題 医療系学生のボランティア活動に関する国内文献の概観
3. 学会等名 日本看護研究学会中四国地方会 第31回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松井美由紀
2. 発表標題 学生の継続的なボランティア活動に繋がる体験－国内文献による検討－
3. 学会等名 第44回日本看護研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松井美由紀
2. 発表標題 医療系学生の継続的なボランティア活動に至る過程
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮宇地 秀代  (Miyouchi Hideyo)  (70736785)	愛媛県立医療技術大学・保健科学部・助教    (26301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	枝川 千鶴子  (Edagawa Chizuko)  (00363200)	愛媛県立医療技術大学・保健科学部・准教授     (26301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関